

編集後記

大変遅くなりましたが『青山 地球社会共生論集 第4号 退職記念号』をお届けできることをとても嬉しく思います。学会として初めての退職記念号を刊行するにあたり、新旧理事会員のみなさま、また創志企画の面田様には多岐にわたってご協力をいただきました。心より感謝を申し上げます。

地球社会共生学部にとりまして2018年度は実に記念すべき年となりました。第1期生の卒業生たちがあらゆる分野に飛び立ったこと、そして学部構想から開設後の大事なこの4年間、多大なご尽力を賜りました6名の先生方がご定年を迎え、ご退職をされたことです。この号の升本学部長の巻頭言を拝読すると1つ1つのシーンが思い出されとても感慨深いです。そして地球社会共生学会の活動も幅が広がり、初めての盛大な卒業生パーティも開催いたしました。

この記念すべき退職記念号には、地球社会共生論集の創刊号から常に玉稿をご投稿くださいました真鍋一史名誉学会員からの特別寄稿、さらに会員からの2本の論説に加えて公開特別講義を掲載することができました。この記念号も従来通り、論文ごとに本学会員を含む青山学院大学学内2名の先生方の厳正な査読のもとに、数回の修正を加え掲載しております。本論集のためにお忙しい中査読を快くお引き受けくださった6名の先生方には、この場を借りて深く御礼申し上げます。

さて、翻訳者の井上太一氏が、最近の翻訳書のあとがきで下記を書いています。

越境する生命たちの運命は、科学と政治だけに委ねられる事柄ではない。それは文化の問題であり、言説の問題であり、正義と倫理の問題でもある。地球の荒廃が進み、帝国と資本の横暴が強まり、ますます多くの者たちが望むと望まざるとに関わらず「認められた帰属」の場を離れゆく現代という時代の中、私たちは人文知の結集によって、「外」から訪れる同胞たちとの共存を模索していかなければならない。侵略者との戦争という終わりなき悪夢を、歓待すべき客との邂逅へと変える道は、その絶えざる関係刷新の内にこそ見出される。(ジェームズ・スタネスク、ケビン・カミングス編 井上太一訳『侵略者は誰か』、以文社、2019、p. 305)

原作は人間と自然の関係を人文社会科学の視点から論じた論考ですが、グローバル化やテクノロジーの進化に伴って、これからますます言葉による多元的思考が、あらゆる共生に不可欠になるでしょう。僭越ながら地球社会共生論集が知の邂逅を生み、社会の変容に呼応しながら活性していくことを願って筆を置きたいと思います。(尚)